



回

生



第47号

目次

【詩】	めをさませ めをさませ めをさませ 死	中村正秋	4
-----	---------------------------	------	---

【評論】	郡山弘史について ―詩「O m o n i」をめぐって―①	金子忠政	6
【詩】	リュウと子供	前沢ひとみ	14

【詩】	しじま ― 森の口寄せⅠの①	金子忠政	16
	情報短信 (From Koguma)		20

【詩】	たいら PartⅡ	秋網まさお	30
【詩】	海岸を梳って	真野絵里加	32
【詩】	森の中	小熊昭広	34
【詩】	マルの朝	小熊昭広	37

ランダム・メモリー

表紙画
URL : <http://tsurumakidou.xxxxxxx.jp> 明才

めをさませ

めをさませし

中村正秋

めをさませ死

目を覚ますには 目覚まし時計を使うのがよい
朝 八時に起きるのに 使うがよい
眠れない夜に時計の針を動かして
八時前に目を覚ますように

めをさませ

めをさませ と でも

本当はめをさますな ということになる

形あるものを見ると

形あるものにこだわり

見えるものにとらわれ

見えないものを 見ることになる

目を覚ますな 死よりも先に めをさますな

形あるものに 目を向けるな

創造できるものに 目を向けるな

創造は 新しい想像を 勝手に作り

新しく 言葉や形を作り

変化することを 当然のように 想像し

めをさませ 死 よりも先に 目を覚ませ

映像に従う言葉に 寄り添うことは 簡単に
安易に従う 言葉は 信じるに足りない
音に従う言葉に ついていくのは

めをさませ 死よりも先に 目を覚ませ

郡山弘史について―詩「O m o n i」をめぐって―^①

※ 詩に辿り着く前に

金子忠政

秋元潔は『尾形亀之助論』の「食うことの心配」をしない極道者の詩」の中で、尾形亀之助と比較しつつ、郡山弘史を以下のように紹介している。

「仙台出身の詩人、郡山弘史は「食うことの心配」をするふつうの社会人。世界的な政治の循環障害のなかで社会参加に希望をつなぎ、誠実に生きようとしてきずつき、「詩史の表面」から消えた不運な詩人」

「郡山は、社会参加と縁遠かった尾形の生きかたに反発をおぼえつつ、戦後の妻の元氣ハツラツとした活動にへきえきし、尾形のように無根拠を根拠とする極道者の自由をうらやましくおもったかもしれない。「食うことの心配」とのたたかいのなかで社会参加した郡山弘史のプロレタリア詩運動のころの作品集はまとめられていないのに、「食うことの心配」をしない極道者の詩、尾形亀之助の作品集はまとめられている。「食うことの心配」とのたたかいという一点で、郡山弘史の立場は、「農民芸術綱要」をまとめた宮沢賢治の社会参加の初心とところざしをともにする。尾形が、石川善助追悼記や宮沢賢治追悼記（明滅）をかき、石川や宮沢とのみずからの

立場のちがいを鮮明にしたのは、「食うことの心配」をしない極道者の詩をかきはじめたちよūdそのときだった。」

秋元は愛する尾形を「極道者」と半ばアイロニカルに述べるにあたり、同時代に生きたとはいえ、なぜわざわざ郡山を比較の対象としているのだろうか？郡山が「単に」「食うことの心配」とのたたかい」をおこなった詩人だったからなのだろうか？つまり、尾形の、言わば同時代における「極道者」性を際立たせるための引き立て役として、尾形以上に「不運な」詩人としての郡山を選んだのだろうか？仮にそうだとするなら、それはあまりにも郡山に対し失礼な選択であり、彼の生への侮辱に他ならない。したがって、秋元が郡山を選択したのはそんなことからではあるまい。秋元潔は、その尾形論を通読すればわかるように、愛して止まない尾形を論じる時でさえ、鋭い歴史的視座からの常に冷静で公平なアプローチを忘れない。そんな彼が、単なる引き立て役として郡山を「利用する」とは、私には思えない。そのことは最初の引用の後半を注意して読めばすぐにわかる。彼は郡山を「世界的な政治の循環障害のなかで社会参加に希望をつなぎ、誠実に生きようとしてきずつき、「詩史の表面から消えた不運な詩人」と規定している。秋元はとりわけ「誠実に生きそうしてきずつき」という点に強い共感を覚えたにちがいない。この共感は、極道者と言いつつ、その「極道者」性の中に「自己自身に誠実に生き」た姿を尾形に見出すことと同義である。

ところで、郡山のこの「誠実」は、もう一人の詩人・

辻井喬をも強く引きつけて止まなかった。例えば、以下の詩篇で、彼は郡山を取り上げている。

ほんとうに革命がくると信じて

親からもらった商家を売ってしまった男の話を聞いた

千里眼の女流コラムニストに相談すればよかったのに

僕が会った時は風太郎だった

それこそ風に吹かれて

仲間にも裏切られて

それでも自信と矜持にあふれて 荒地を耕していた

とおくへ続く送電線が鳴っている

それは男のいのちの音のように聞えた

「なぜ全財産を」などと質問はしなかった

夢にみつぐ以外に献上先はないはずだったから

狂王の豪奢よりもぜいたくに

いちばん愚かで いちばん綺麗に生きた奴だと

通夜の晩に 裏切った仲間が吠いていた

時は五月 明るい若葉の季節だった

男の胸中には牡丹雪が降りしきっていたような気が僕

にはする

「いまではもうこんな生き方をする奴はいないね

せちがらくなってしまうて」

「いや 夢が持てない時代だからさ」

ひとしきり楽しい議論に花が咲いて

豊饒の海は近づいてみると火山噴火の痕だらけで

かつての 虚栄の市を想起させる

「あとで神秘主義者になった宇宙飛行士がそう言うて

いた」

という結論で終った

あの男はこおろぎの声を聴く耳を持っていましたよ

（辻井喬「群青」「I時の埋葬」）

いちばん愚かで いちばん損なふうに生きた男

自信と矜持に満ちて荒地を耕していた

胸に牡丹雪を降らせていた男

（辻井喬「群青」「IV自死」）

「男」とは郡山弘史である。（蛇足だが、この詩のなかの「せちがらくなってしまうて」のどんづまりが今に他ならないと、私はノー天気悲観し、イ・アンの歌のようにヒビヒビヒと笑う。そして、是枝監督の最近作中のリリー・フランキー演じる詐欺師まがいの探偵のセリフ「時代に感謝しないとなあ、この小さい時代に」を思い出しつつ、欺瞞だらけの誠実さという矛盾に、矛盾とは思わずに瞞着し、無政治性のすべすべの手を持ち、ほんの少し否定的に批判されるだけで、クレマーのようヒステリックにいきり立つ、妙な自尊心ばかり肥大化させた、頭の良い人々を想起する。）

また、この晩年の自伝的な一連の詩篇が書かれる前に、辻井はすでに小説「彷徨の季節の中で」において郡山を想像させる人物を登場させている。この小説は、病も癒えた私（津村甫＝辻井本人）が屈折した心を抱いて

「競争世界から脱落することによって」自由になり、「本来の自分に還る」生活を志しているかつての同志を東北に訪ねるところで幕が降ろされるのだが、この同志とは、共産党に全財産を捧げ革命の夢破れてのち、東北で生活していた詩人の郡山弘史、吉江夫妻がモデルとされている。

さらに辻井の第一詩集において、

素朴なものを信じて
美しく生きた人の話が聞きたい
いつか
用意が出来たと言いきれる人の
優しさについてすっかり聞きたい

忍耐とは

おのれに絶望しないこと

素朴なものを信じて

一番暗い闇からさえ

美しく生きた人の話をききに

人は鳩を放つと言うことを

俺は確証したいのだ

（辻井喬第一詩集「不確かな朝」より）

なぜ辻井喬が、これほどまでに初期から晩年を通じ、この「美しく生きた人」、郡山弘史という詩人に強く惹かれ、そこに自らに欠落しかかった何かを、絶えず見続けようとしていたのだろうか？

その時代の制約のためにも進み得なかった道を受けついで、それをおし進めたところに、大きな歴史的意義があり、権力の問題を文学運動の課題として真正面におしだしてそれとたたかったのは、日本の文学ではじめてであるといつてよからう」

郡山の初期の、そして唯一の詩集、つまり『歪める月』（一九二七年発行）は、「観念主義や公式主義」とは離れた所で、しかもプロレタリア文学の正の側面としての権力の問題に、ある必然性を持って主体的発露として対峙している。

（ここで、余談、というか寄り道。ノーマ・フィールド氏の以下の言葉「社会変革を求める文学―これを日本語で『政治的』と言った途端語弊があるかのように聞こえるのがそもそも問題なんですが―を積極的に引き受けて論じてみないと、いつまでも近代のエステティックス、美学の虜になってしまうと想います。」氏にならって、「文学の使用価値」というものを、改めて考えてみなければと最近強く思う。それは「かつて大きな物語としての社会主義に身を投じた数え切れない人たちの夢と犠牲を吐き捨ててしま」わないことである。「正義の闘い」の物語を終わったものとして片づけるわけにはいかない、とりわけ閉塞感が極まりつつあるこの現代においては。チマチマと仲間内での無色透明な詩の美学に、のほほんと耽溺している場合ではないのである。先鋭的？実験的？などと宣ったって、外部の権力にとっては屁でもなく、勝手にやっつてろ！ということになっているだけだ。そんなもなあ、先鋭的でも実験的でもあるはずがない。）

秋元同様に、いや、秋元以上に、辻井にとつての郡山の存在の重さが、彼の詩篇を読むと歴然としてくる。さらに秋元の言葉を借りれば、辻井にとつても郡山は「世界的な政治の循環障害のなかで社会参加に希望をつなぎ、誠実に生きそうしてきつ」いた唯一の詩人に他ならなかった、ということ、これらの詩篇から私は確信する。

私は、この二人の詩人の言葉から、郡山の中に一見すると対極にあるような尾形亀之助と不思議に通底するモノを見る。それは、自己の生への真摯な態度と言った方がいいのか、時代の流れに押されてしまつて付和雷同することなく、また、決して計算高く世渡り上手になつてしまわない、そんな（誠実さ）、とでも言つたらいいのか。彼が否定的な意味において（つまり、イデオロギーに凝り固まつた）プロレタリア詩人であるかどうかなどは、私にとつてはどうでもいいことだ。

ただし、戦後すぐ発刊された『日本プロレタリア詩集1928～1936』の「解説」において壺井繁治は、「その観念主義や公式主義や爪先立ちや骨ばり」とし、プロレタリア詩を歴史の中において検討すべき対象として幾分自省的に述べつつ、以下のようにも書いている。

「権力に生身をさらして荒々しくたちむかおうとする態度は、近代文学としての自然主義の末期にはほとんど全く影をひそめ、日本文学の中に「政治」と断絶した心境の中に埋没することによって辛うじて「文学の純粋性」を保持しようとする伝統をつくりあげたのであるが、プロレタリア文学（詩をふくめて）運動はそのような伝統に対するアンチ・テーゼとして、啄木が進まうとして

彼が後にプロレタリア詩へと進みゆくことがこの詩群を読むと当然のように予想できる。しかし、私が注目したいのは、「文学の純粋性」を保持しつつも、自身の心に正直であるがゆえに、彼が外部権力の問題に不可避に行き着いてしまったということである。最初に主義ありきではない。徹底的に自分自身に正直であり続けることが、いかに困難なこと、いかに大切なことなのか、ということを考える時、私は尾形に加え、尾形と対極にある郡山を想起する。

言わば同時代の日本の詩人たちの多くが失いかけていた、裸眼で見つめる（誠実さ）のようなものの原型を、彼がプロレタリア詩に向かう前に書いた、唯一の詩集『歪める月』の中に見出し、そこにイデオロギー的視点によってパターン化されていない根源的なボエジーを見出す。例えば、それは『歪める月』の「例言」に見られる以下のような文章を読めば容易に察することもできる。

「6・「その四」・朝鮮の地に比較的関係のある詩篇のみを入れて見たのであるが、厳密な意味に於いては風物詩篇及び異邦人としての叙情詩篇に別たれる・

私思うに・風物詩は説明でも紹介でもない・されば此の章に編入されてゐる半数は此の地を知らぬ友に理解し得ぬあるものが含まれてゐる筈である・例へば朝鮮風の糸巻きを見た事のない人は「廻はす」といふ言葉を奇異に感じるであらう・しかし私はその説明を詩句に敢えて必要とは思はないのみか・却つてその考慮は一つの巨いなる誤ちですらあると信じたい・

風物詩は飽くまでその地の人人と共に歌はるべきであ

る・何んの説明・何んの道案内書とならねばならぬ筈があらう！

とは言へ・私の貧しい収穫を透うして此の緒土に萌芽する何ものかの片影にふれてくれる友が獨りでもあったら私の喜びは大きい・特に「衣裳風情」は朝鮮の人人に贈りたい・全くのエトランゼである私が何を如何に感觸したか・この地に在住すること二年餘り・しかもあまりに怠惰であつた私はこれしきの贈物きり出来ない事を辱じる・」

ここで彼は、作品の内容そのものには触れずに、自作の解説のようなことをしているのであるが、そこにおいて、詩篇において登場する表現に関し「此の地を知らぬ友に理解し得ぬあるものが含まれてゐる筈である」と言いつつも、「私はその説明を詩句に敢えて必要とは思はないのみか・却つてその考慮は一つの巨いなる誤ちですらあると信じたい」と（日本！の）読者を突き放す。なぜなら、「風物詩は飽くまでその地の人人と共に歌はるべきである」からである。ここには、できうるかぎり彼が今まさに暮らし、詩作においてインスピレーションを与えた植民地・朝鮮の人々への真つ直ぐな思いがにじんでいる。そして、さらに、「とは言へ・私の貧しい収穫を透うして此の緒土に萌芽する何ものかの片影にふれてくれる友が獨りでもあつたら私の喜びは大きい」として自分の詩篇を読むであろう宗主国・日本の人々の中に「此の緒土に萌芽する何ものかの片影にふれてくれる友」が現れてくれることを期待するのである。さらに、それ以上に、彼は日本人の人々というよりむしろ朝鮮の人々にこ

そ、自分の詩篇を贈りたいと宣言し、同時に自分があくまで「全くのエトランゼ」であること、怠惰のあまりこれだけの詩篇くらいしか贈れないことを「辱じる」のである。

一人の日本人数員として、朝鮮に赴任した人間である郡山の強烈な自覚、自分が植民地支配を行っている当事国の国民であつてしまうことへの自省、あるいは羞恥がこの「例言」においても明確に表出している。当然ながら、その詩篇においても彼は支配してしまつてゐる「異邦人」としての自己を鋭く見つめてゐる。

閑話休題。郡山とはほぼ同時代において朝鮮人民へ真摯に接近しようとした著名な詩人には「長長秋夜（ちゃんちゃんちゅうや）」（一九三五年）の小熊秀雄、「雨の降る品川駅」（一九二九年）の中野重治、「間島バルチザンの歌」の植村浩、そして、「地図の上朝鮮国にくろぐろと墨をぬりつつ秋風を聴く」の石川啄木などがあげられるが、ここで、この先郡山の詩について入り込んでいくにあたり、言わばそのための準備運動として、郡山とはほぼ同時期に教員という同じ職にあつて朝鮮に滞在した（住んだ）もう一人の詩人を、先行論文に従いつつ、紹介させていきたい。

もう一人の詩人とは、郡山が同人であつた『亜細亜詩派』にも詩を投稿してゐた内野健児（後の新井徹、1896-1944）である。内野は長崎県対馬に生まれ、一九二一年朝鮮の忠清南道の大田中学校で教員として生活、一方で一九二二年に「民衆の文学化運動と郷土芸術の確立」を掲げて雑誌『耕人』を創刊した。「小田切秀雄によると、新井（内野）も「はじめは植民地支配についての鋭い自

覚や抵抗というものをもっていない。（中略）が、かれ

はしだいに民族的偏見や蔑視から脱して朝鮮人の友として振舞おう」とした。そして、一九二三年、詩集『土墻に描く』を発表したが、発禁処分になつた。『植民地朝鮮の日本人』高崎宗司）なお、詩集『土墻に描く』発刊は、郡山の『歪める月』発刊の四年前である。

内野もまた郡山同様に、単なる異国趣味いわゆる、オリエンタリズムではない次元において、『風物詩』を試みた詩人の一人である。その『風物詩衣裳風情』の一つに「白衣」がある。楠井清文氏の論文『植民地期における日本人移住者の文学』を以下に要約・引用することでこの詩人の詩について付加したい。

「白衣」は、日本人と朝鮮人の距たりを意識させる景物であり、朝鮮人の「日常」に属してきた「白衣」を着る」という行為は、日本人の視線を受けることで、特殊な意味を担うようになった。門戸開放（一八七六年）後、日本人に眼差され、解釈されることによって、白衣の日常性は破壊され、社会にさりげなく存在しうるものではなくなる。社会における白衣の安定性は失われ、白衣は、解釈・表象をめぐる闘争の（場）としての性格を帯びていく。

渡航してきた日本人にとって、「白衣」は「朝鮮の風景」を意味すると共に、「有徴化された朝鮮人の様々な（特徴）」を包み込んだものの、言い換えれば朝鮮人の表象」となつた。つまり、朝鮮人／日本人という自他の違いを、目に見える形で示す記号となつた。日本人移住者文学の中には、「白衣」を単なる他者性の表現に留めていない

作品も存在する。それが内野健児の作品である。

彼の活動を支えたのは、「朝鮮独特の内容を表現したい、内地の詩人が内地に於て生産する作品とは別種のもの創造したい」という希望であり、彼自身の作品も「口ーカル・カラーをめざす傾向が強かつた」。また自作を「郷土文学」としての「朝鮮詩」とも表現している。彼は、朝鮮を「郷土」とする日本人移住者の文学を確立することが重要だと考えていた。

内野の特徴は、朝鮮人の生活や心情を積極的に理解しようとする傾向が見られる点である。そこで彼の作品における「白衣」表象の変化を、発表順に辿つてみる。

最初期の作品「白衣讃章」（『耕人』一九二二年六月）では、「白衣」が朝鮮人の日常着として、明るい肯定的なイメージで描かれる。

燦々たる野の春光に

白衣ひらめかして

鎌を

振ふ彼等「……」白衣は彼等の労働服であり

且つまた彼等の礼服である

あゝ清浄なる雪白

の衣服！

きらびやかなる粉飾を追はず

土に生れて土に生きむとする

彼等はどこまでも

自然の子である「……」故に、彼等は束縛を忌み

どこまでも解放されたる自由を欲する

自由は彼等の生命である！「……」徒らに文明の

利器の騷擾の中に

朝鮮の伝統を破壊し終ることなく
彼等自然の生命をして伸ばしめよ

「白衣」は、人々の「自然の生命」を象徴する。作中で「文明の利器」と「朝鮮の伝統」が対比されていることから分かるように、肯定的なイメージもまた、「文明」Ⅱ近代化から隔絶したものととして朝鮮を位置づけていることが見て取れる。

このように、初期の作品では朝鮮人に接近しようとする意図がありながら、内野自身の理想像の投影に終わっているものが多い。しかし、後期になると、「白衣」の明朗なイメージばかりではなくなる。特に注目したいのが、「李王薨去——桜、花咲く四月二十六日は、午前六時十分こときれ給ふ」（『朝鮮芸術雑誌 朝』一九二六年六月）である。

白衣白衣白衣白衣白衣白衣白衣白衣白衣

……

しらじらと、しらじらと

敦化門にひた寄せる波のむれ

あいごをうあいごををうをうをうをう

……

やるせない唸りは

渦巻いてせまる！

鈍色の昌徳宮——

かきにごされた大空の胸に

しぶく桜の群葩も蒼ざめはて、

あいごをうあいごををうをうをうをう

……

重々しい心は圧搾されて

里から洞から——鐘路へ敦化門へ

白衣白衣白衣白衣白衣白衣白衣白衣白衣

……

この作品では、まず活字の羅列が視覚に訴えかけてくる。他の詩と異なり、「白衣」が風景の一部分として点描されるのではなく、「波のむれ」として読者の目に迫ってくる印象を与える。同様に繰り返される「をうをう」という音声も、「やるせない唸り」や「圧搾」された「重々しい心」の表現として捉えられる。

ではこの詩は、どのような場面を描いたものだろうか。「李王」とは、題名が示すように、一九二六年四月二十六日に死去した李朝最後の皇帝・純宗を指し、彼の死を悼んで昌徳宮前に集まってきた人々の姿が、この詩のモチーフである。当時の新聞報道では、「朝鮮内においては、発表の日より三ヶ月間王殿下に弔意を表すべく白衣白笠を着用すること、なつた」が、それから間もなく「この群集に紛れて不穏なる言動をなす」危険性を理由に、総督府は国葬当日まで宮殿前での「哀号」を禁じている。

以上から分かるのは、この詩が、人々の「哀号」という行動の、より奥底にある動機を想像する形で成り立っていることである。作者はそこに、植民地支配の「圧搾」に対する朝鮮人の「やるせない」心情を読み取った。その心情を、押し寄せる「白衣」のイメージに具象化し、

この詩の読者に伝えようとした。つまり「白衣」は、朝鮮人／日本人という自他の違いを強調する表現でなく、朝鮮人の感情を理解する手段として用いられている。」

本題に移りたい。『歪める月』には、まさに「異邦人」という詩篇がある。

異邦人

重い小さな窓である

こんな所で覗くと月までが斑點のやう

ぼくは轉つてゐる

女がまっちをする

——消えてゆく匂ひのなかで

ふるさとの白い手が浮ぶ

「もつと温突をたいてお呉れよ」

——何もかも馴れることだ

——馴れることは怖い幸ひだ

いま月が入ってきてゐる

女は裂けた鏡に髪を弄んでゐる

ぼくは全くの異邦人になりたい

異国にあって、異国の女性とともにいて、彼は一瞬だけ故国・日本への郷愁にさいなまれる。

その郷愁を打ち消してしまいたい衝動にかられるのであるが、打ち消してしまつたためには「馴れる」ことが不可欠である。しかし、同時にそれは「怖い幸ひ」でもある。その「怖し」さを象徴的に示しているのが「女」に「弄」ばれる「裂けた鏡」なのかもしれない、いやこの二連「いま月が入ってきてゐる／女は裂けた鏡に髪を弄んでゐる」で示された情景そのものが、まさに「怖い幸ひ」に他ならないのかも知れない。それゆえに、直接的であるがゆえに印象的な最終行「ぼくは全くの異邦人になりたい」が鮮烈に前景化してくる。「全くの」ということは、故国からの引きづりを、日本への郷愁を一切断ち切つた、断ち切つたことすら忘却した地点に立つことへの願望であり、それは同時に支配／被支配の関係のただ中に立つことへの不可能な拒絶でもある。

「それは郷土から中央に向かって、放たれた一つの、鋭い大きな、カブラ矢であつたことを証拠立ててゐるからである。……」

作品のうち、――冬情、異邦人及び秋風詩章第一節木版繪などは従来朝鮮を謳った人々のうち未だ誰にも達してゐない詩境であり、秀れてゐる作品として推奨すべきものである。（井上位人「亜細亜詩脈」）

※追記

校正原稿を小熊氏よりいただいて後に、気づいたことであるが、冒頭にあげた故辻井喬氏は、二〇一〇年に有志詩人達によって刊行された『朝鮮学校無償化除外反対アンソロジー』に、「オモニよ」という題の詩篇を寄せている。

リュウと子供

前沢ひとみ

真夜中の国道をリュウと子供が歩いていました

また会える？

子供は、無邪気に問いました

リュウは答えました

見て、月がきれいだ

見ると

月はリュウの目のなかでちらちらと輝いていました

また会えるよね？

子供は、再び問いました

風が、もう秋だね

リュウは答えました

見ると

リュウの長いひげは風になびいていました

ねえまた会える？

子供は、不安になって立ち止まりました

リュウは答えました

その言葉、8回目だよ

子供は、驚いて問いました

また会えるよね？

リュウも立ち止まって答えました

その言葉、9回目

子供は、混乱して叫ぶように問いました

また会えるんだよね？

その言葉、10回

リュウは

涙がこぼれぬようカッと目を見開き力をふりしぼって答えました

しじま——森の口寄せⅠの①

金子忠政

「日々少しずつ忘れる、少しを畏れよ」(季村敬夫)

蛙が膝にきて、

「きさまのまなざしは

断崖のようにきりたっているのか？

墓標にするために石の言葉は積まれるのか？」

そのつぶらな濡れる瞳

ゆびさきの火を消し

胴を折りまげて

石を積むように

沈黙を、

ただそれだけのものにする

やわらかい俏し

和解は冷たく捨てられ

憎悪の消息が

世襲のよそよそしさに鞭打たれ

踏みにじられる

それでもなお、憎悪する

開花のふるえのように断言し

慰めのない鼓膜に

つきることない石が生じる

カッと眼を見ひらき

耳をそばだてる

じかに頂きにふれなければならない

手をたいそう縮め

試み、試み

石のすみずみに座礁し

発音に追いつかないまましゃべるように

小さく小さく連打して

霧が、また
こともなげに
這い寄ってくる
魔物に背後からこづかれ
からだがかたくなり
ふりほどこうとしておびえ
くらくらかたむき斃れ
書かれる荒廢地へ着地し、
生乾きの声が
水びたしの淵へ
心地よく呑み込まれる

捨て鉢に席を立ち
水底にしずむように
店先のマンホールに座りこみ
側溝を見つめ日陰をつくる言葉を探し回る

うまうまと生きのびる飲食^{おんじき}の
わたくしの、薄っぺらい哀しみは

うす闇のなかへ
渦をまいて遠ざかり
味覚を喪う子どもたちが
不明の死を眺めるように
霧の中でぼんやり音楽を聞いている

情報短信 (from Kojuna)

▲2017.09.24 BS朝日の報道番組を見る。テレビに映る伊藤めぐみさんの取材している姿が、どうも山本美香と重なる。デジャブのよう。寝際に Donald・キーン『正岡子規』（新潮社）

▲2017.09.25 この日から、中尾拓哉『マルセル・デュシャンとチェス』（平凡社）を読む。

▲2017.09.27 午前、原稿用紙を刷る。五号四分の野線を組版して、印刷まで予定通り終わる。午後、妻を美容院に送り、村田町養生にある自然酵母パンの店「麦屋」を目指すも、月・火は定休とのこと。蔵の喫茶店で一時間余りを過ごす。竹内英典「歩くひとの声」（発行所：滯標）のこと。夕方、妻を迎えに行く。寝床で、中尾拓哉『マルセル・デュシャンとチェス』。

▲2017.09.27 終日、中尾拓哉『マルセル・デュシャンとチェス』を読み続ける。四次元の可視の領域では姿を現さない。それを三次元の影として表現したのがデュシャン。絵画は、頭の中で成立しているがそれをキャンパスに描くときに、消える部分がある。それが影。その落差を表現すること。絵を描くことは、選択、配置。



▲2017.09.29 寝際に、中尾拓哉『マルセル・デュシャンとチェス』読了。

▲2017.10.07 朝食後、息子と山形へ。山形国際ドキュメンタリー映画祭観たのは、フレディ・M・ムーラーの『パシフィックーあるいは満ち足りた人々』1965/60分、『フランス』1965/12分、『ジュルヴァン』1965/12分、『サッド・イズ・フィクション』1969/32分、『盲目の男のヴァイジョン』1969/23分。パズルのような印象。人間の感覚や感情は常に、死や欲望との関係で動いている。面白かったのは、『パシフィックーあ

るいは満ち足りた人々』。

▲2017.10.10 寝際に Donald・キーン『正岡子規』。大して面白いとは思わないのだが、外国人の視点と、正岡子規の本性的ようなものが相混じり、違う人間を（そもそも私は彼を知らない）知っているかのような錯覚を起こして、なんとか面白く読んでいる。



▲2017.10.14 庭の剪定、昨年と同じく座禅会で知り合い、懇意にさせていたにしている庭師にお願いする。シュロという南国の植物を三本取り除く、ツツジは二本、命を五つ殺したことになる。午後三時前終わる。手を切る、血が止まらない。梅の木と柚の木を自分で剪定する。棘のある柚の木の手切り終わった枝の処分のことを考えると憂鬱になる。夜、チンゲン菜と海老のあんかけ炒め、それに餃子。白ワインで食す。あまり食欲というか、酒が美味しく飲めない。気分が、ちよつと悪い。ユートピアノ 松永さんから移転の案内状。たかはしさとみさんから個展の案内状。詩誌『霧笛』拝受



▲2017.10.15 未明。詩誌の編集というか、自作の制作、結構難儀する。外が明るくなり、一斉清掃。誰もしていない。妻と、せつせと行う。しばらくして、マルと散歩。娘の部屋の掃除。それ終わり、活字を入れるすだれの棚を製作。作業所に芸大版画教室カレンダーを掲げる。午睡。起きて、本棚の移動。タ、ミスドで詩誌の推敲。けっこう捗る。

▲2017.10.18 午前十時三十分、母を病院に連れて行く。終わったのが正午過ぎ。家に帰って昼食も摂らずに、急いで仙台へ。駅構内で土産（ハイ

デルベルクというお菓子、名前が面白い。）を買って、歩いて印刷所へ行く。ここは、かつて竹林嘉子さんの版画に私の言葉を印刷していただいたところ。その縁で無理を言って活版印刷の話を聞かせていただきに伺う。まだ植字台や込め物は残っている。活版用の印刷機械は、自動で平圧式一台と蝶番式一台がある。鳥居と木製インテルと活字ホルダーを分けていたたく。嬉し。それに、コロとコロが転がる部分に油が付いていると綺麗に印刷できないこと。また、スーパークリーンというインクの洗浄液を教えていただく。

▲2017.10.20 未明、詩誌の校正。最低限の修正を行う。再度入稿。活字の注文。

▲2017.10.21 ロボットカードの印刷開始、adana 5×3 で七二枚。結局、昼までかかる（誤算）。午後、和紙の裁断。一筆箋用、原稿用紙用、TODOLIST 用に別けて裁断。これも午後四時頃までかかる。それ終わり、走る。心拍数が高い。夜、一筆箋と原稿用紙の朱による印刷。朱のインキはかなり硬い。

▲2017.10.25 娘を白石蔵王駅に迎えに行く。孫が生まれる、実感なし。

▲2017.10.26 未明。日記の製造（詩編）。それ終わり、ぶらぶら。走る。夕刻。仙台のギャラリー「でたかはしさとみさんのグループ展。諸々の話をさせていただく。楽し。

▲2017.10.28 夜、竹林嘉子さんから版画が届く。版画が刷られた紙の余白に詩を印刷するのが楽しみ。

▲2017.10.29 篆刻を作る。なかなか上手にできないが、二本仕上げる。朝食後、最初に『ROBOT CARD ZINE』の表紙づくり。それ終わり、原稿用紙と一筆箋の帯づくり、そこで今日の印刷作業は終わり。午睡。起きて、走る。詩誌届く。人間ドッグの結果を知る。やや憂鬱。

▲2017.10.30 未明。早く起きたのだが、何をしていただろうか、分からない。夢遊病者のように朝を過ごしている。早駆けて、込め物を大量にいただく。裁断機械の購入を勧められるが、今は置き場がない。家に帰り、とりあえず物の置き場所を整理する。興奮あり。

▲2017.11.01 深夜、ふふ帰る、ROBOT CARD ZINE の製本。

▲2017.11.03 未明。詩誌「回生」におまけで付ける葉を作り始める。頭の中のイメージはできているので、それを組版する。二四ポイントの花形活字に五号の約物を合わせる。組版は二十分くらいで終わる。それから adana 5×3 で印刷開始。一時間ほどで終わる。結構素早い仕事。我ながら感心。走る。朝食後、家を出る。午前八時半頃友人と会い、アート展へ。カレンダーは結構評判良かった。それに TODOLIST も、意外と駄目だったのがロボットカードとコースター。原稿用紙はイマイチ。

▲2017.11.05 未明。竹林嘉子さんの版画に言葉を添える作業。夜明け前までに初稿ができる。嬉し。

▲2017.11.06 未明。詩誌の送付リストを再調整。それから宛名のシール作り、それを封筒に貼って添え書きを自分が作った一筆箋や原稿用紙に記す。そこまでで夜明けとなる。寄稿者の方々には朝に投函。帰宅して、マルの散歩。夜の散歩は初めて。月がきれい、星も丸見え。なんて綺麗な夜なのだろう、空気も穏やか。JEIDE SIGNAL LAMP (Pale Green) 届く。思ったよりも小さいけど格好いい。

▲2017.11.08 未明、決定稿とした竹林嘉子さんの版画に添える言葉の棚付け作業、当然あると思っていた文字の活字がないことが判明。作業を途中で終える。先日、自宅に来ていただいた紙屋さんに和紙を注文。

▲2017.11.09 築地活字店に漢字二文字の活字の注文。「杷」はあるもののう一つは母型そのものがないという。

▲2017.11.11 未明。文選箱から活字を取り出し、棚組み開始。よく見たら、「水」が「氷」だった。多分、最初に活字を揃えたときに、「活字屋さんが間違えたのだろう。そこで、違う表現をしばし考える。「氷砂糖」を「水飴」に変える。それに伴い、他の言葉も変わる。その間、マルと散歩（頭をもう一度フラットとするため）。途中、ほおずきを拾う（暴力的に抜く）。朝食後、組版。その後、用を足しに外出する。その間、活字が届く。ファミマで証明写真の印刷、コミュニティセンターに寄って一月の読書会の予約、郵便局から資格試験の試験料と申込書の送付、ホームセンターでゲラづくりのための木材とタマネギ、パセリ、越冬キャベツの苗を購入。昼食の材料の調達。午後、試し刷り、見当の決め、印刷終了は午

後五位位。走る。夜、白ワインを飲んで寝る。通信…礼状（切手同封）一通。先日の活版印刷の資料の御礼一通、届く。竹尾からフランスの手漉きの紙。ガラス瓶。

▼2017.11.18 今日読書会（活版印刷のワークショップ）に結果的には申込者が居なかったので、暇になる。それで、朝食後、仙台の小田原にあるメアリーコリンに行く。しばらく竹内英典氏の詩集の感想を書いていたが、他のお客さんがいなくなつたので、活版印刷で作ったステーションナリーのモニタリングをお願いしてみる。作品を気に入っていたいたうで、早く受け入れてくれる。嬉し。

▼2017.11.19 午前五時まで熟睡、めずらしきことかな。マルの散歩。朝食後、昨日届いた adana 1931 baby の清掃。それ終わり、原稿用紙の印刷をしようと思ったが、二日酔いか体調が悪いので、ぶらぶら。昨日の続きの竹内英典氏の詩集『歩くひとの声』の感想を書く。情報短信のブログに掲載。

▼竹内英典氏の送られてきた詩集『歩くひとの声』（発行所…澤標（みおつくし）、二〇一七年八月一日発行）を読み出したとき、それが竹内氏の二冊目の詩集ということに驚いた。それは、たった一冊しか、これまで詩集は出していなかったのかということに対する驚きだ。確かに、私の中では竹内英典氏の詩の印象は、詩集『死者たちのとき』に書かれている言葉から、先には進んではない。いただいた貴重な限定本詩画集『影』にしても、第一詩集『死者たちのとき』の一卵性の双子のようなものとして読んでいる。それは、あまりにも詩「（影）」の印象が強いからかもしれない。

多分、私が最初に竹内英典氏の詩を記憶にとどめたのは、詩誌『ひびき』に掲載された作品「（影）」（詩誌『ひびき』掲載は一九八〇年八月、第五八号）であった。それから、第一詩集『死者たちのとき』（発行所…永井企画出版、一九七四



詩あるいは文章というものに思えてくる。では、何を提示しようとしているのか。

手は人間の意思を表すもの、例えば「手を掲げる」とは何かの意思を表明している。もうできませんという降参の印、サヨナラのあいさつ、歓喜の叫び等々、人間は様々な歴史の場面で手を使い何かをしてきたし、している。それは、決して歴史に残るようなことではないことだろうし、手が注目を浴びることは皆無と言ってもいいだろう。そういう前提で手が象徴することを考えることは、想像することに繋がるのかもしれない。竹内英典氏が提示したかったのは、そういう人の営みを想像することなのだろうと思う。それが、この詩ではたまたま八手Vだったのに過ぎない。だから、小林多喜二の母の言葉が第二連に引用されていることに思想的な意味はないと考えるし、倉橋氏が書いた「思想詩集」とはこういうことを差すのでは当然にないと思っている。

詩「さるすべり」から引用させていただく

僅かばかりの行為の年月が過ぎ

茫々と駅も線路もかき消えたが

折りとは

手を合わせ

打ちのめされた果てに

両手を広げることだと言った友の

その手で折られた一枝が

土に移され

枝を広げ

頭上に漲る光を遮り、

地上に花びらを散らし

次第に巨大な影となったあのものが

畏怖を踏みつぶし

畏怖するものを利用し

惨劇は拡がり 見なれたものとなり

年六月二十日発行）を買求めたのではないだろうか。だから、竹内氏の詩人としての行為については、同時代をいくばかりか重ねて生きているとはいえ、正しい時間に沿って認識してきたのではなかった。

そこで、第二詩集が送られてきた。正直、戸惑った。あれ以上の強烈な印象を残す表現が、果たしてこの詩集の中にあるのだろうか、と。理由は、その後、丁寧に毎回送られてくる仙台演劇通信誌『ACT』や詩誌『ひびき』で竹内氏の詩をときおり読んでいたが、詩「（影）」以上の印象を持つ作品がなかったからである。さらには、倉橋健一氏の詩集の帯文に「思想詩集」という言葉が書かれているので、なおさら焦りのような不安が生じた。思想詩とは、いったいどういうものなのだろうか。それは、これから読もうとする詩集に対する意識を過剰とさせる。また、竹内氏が仙台演劇研究会の通信誌『ACT』に書いている散文が思想的であるから、なおさら「ああ、やっぱり」という納得とともに、詩の可能性の何かが塞がれる思いがした。そこをこじ開けるには、私はあまりにも無知で根気がない。

なので、このいただいた詩集を読む前に、私は読めないという気持ちを持った。それでも、字面だけでも読んでみようと思い、読んでみた。それで、これを書いている。

私に分かるのは、私にとって詩に括りはないということだ。「括り」とはレットルと言ひ換えても良い。現代詩、戦後詩、近代詩、ぶあぶあ詩、震災詩等々である。ある意図を持って書かれる詩は当然にあるだろうが、それは意図と関係なく、詩となる瞬間は読者の中の現象であるからである。であるから、倉橋健一氏が竹内英典氏の詩集を「思想詩集」と表現するのは、あくまで倉橋氏の中でのことであり、竹内英典氏とはなんら関係のないことだろうと思う。

冒頭の詩「手についての断章」を読む。六連からなるこの詩の各節の間には、断章という言葉で表題が示されているようにあまり関連性はないように読める。一つのことから、次のことへ続くことのない時間と場所が繋がらない記憶が、「手」という視覚的な、触覚的なさまざまな人間の感覚を通じて繋がってゆく。それは、竹内英典が八手Vというものに抱いてきた思いが断片的に行分けて書かれることで、一つの世界を提示しようとする

死後は誰にあるのかと彼は手を振った

詩「さるすべり」第二連

この第二連の十行目には注釈の印が打たれ、原民喜の『壊滅の序曲』に書かれている最後の言葉と原民喜の句が書かれている。この注釈がないからといって、この詩が理解できないかと問われると、どちらとも言えないと答えるを得ない。竹内英典氏の詩を読んではれば、ここに書かれている「影」「光」「手」「花びら」といった言葉や、この詩集の発行の月日は、容易に作品の意図することが想像できるものとしている。注釈が、より多くの人に共感を得ようとして書かれたものであれば、それは少々、違和感を感じる。注釈を書かなくても、これ自体で十分ではないのだろうかと思ってしまう。

竹内英典氏の詩は、修辭技法で言えば、それぞれの言葉に隠喩や暗喩が込められているように感じる。前段で「」で示した言葉達がその良い例である。そういう表現を使えば使うほど言葉は抽象的な意味あいや帯び、言葉が届く範囲は狭まる。また同時に、文章は曖昧になる。私はそれが難しい表現や比喩を使ったからそうなるとは考えてはいない。わかりやすい言葉を、端的丁寧に書いたとしても、さほど変わらないと思っている。それでもなお、竹内英典氏は、修辭技法を使った作品を、結果的なのだろうが書いている。そういう表現をとらざるを得ない竹内英典という詩人が私は好きである。一人の人間が生きている、そのことだけで、証言者になることを示しているのだと強く感じる。

なので、この詩集は何の間違いか二冊送られてきたのだが、大切に読んでいきたいと思う。私のようなただ呆然と生きている人間にとってもとても一行一行がとても面白く読めるのである。

▼2017.11.22 宮城大学へ。書体設計士島海修氏の講話を聞く。私が期待したのは、文字と言葉の間のやりとりの思考の部分。それについては、断片的な話があったと思う。例えば、日本における最初の文字は漢字が定説。それは、日本人が中国語を理解し、発音するということ。でも、日本人が

当時使っていた言葉はそれとは違う。大和言葉に近いものだろう。それを表記したものが仮名。仮名、真名の違いの話がある。それから今に至るまでに、日本の文字は漢字仮名交じりになったとのこと。鳥海氏の講話はざっとそういうことだったと思う。その過程の中で日本語自体が変質してきたと考えるが、それは、言文一致の動きが加速してきた中で文字を作るということは、果たして、ただ単にある文字の新しい書体を作ることだけで終わる問題なのだろうか、違うだろう。ということ私の聞きかただったこと。そこまでの思考を捉えることが言葉の端々からはできなかった。

▲2017.11.24 平和紙業の仙台支店に行き注文していた紙をいただく。それから一目散に檣葉を目指す。正午過ぎ到着。セッティングを終え、昼食（鴨ウインナー定食）を食べ、マルの消しゴム版画づくり。結構上手にゆく。サイクリングセンターターミナルに泊まる。温泉が気持ちよい（特に蛸壺湯）。夜、震災で檣葉町の店から避難し、いわき市で営業をしているお店の方にいわきで過ごしそうになる。御礼をしなければ、パッケージ？。読。

▲2017.11.30 寝際にミハエル・エンディの『はてしない物語』

▲2017.12.01 寝際にミハエル・エンディ『はてしない物語』。日中は鳥尾敏雄『死の棘日記』。本を並列して読むこと、珍し。



▲2017.12.02 白石蔵王駅から東京へ。最初に、佐々木活字店の創立百周年記念イベント会場へ。社長にお祝いの言葉を申し述べ、ちよっと雑話。モーメントと花型活字それに店のロゴ活字をいただく。それから芦花公園へ、世田谷文学館の洪澤龍彦展。原稿用紙に走る手書きの文字がなんというか素敵に見える。コクヨの一般的な原稿用紙が多い。二十文字×十文字の原稿用紙が多い。ちよっと嫉妬。夕暮れの気配がするので、もう一つ行こうと

をつけ、午後三時半印刷終了。その後、走る。気持ちよく走ったが、十キロ付近からやはり筋肉痛あり、思いの外、疲れが残る。カリタの電動ミル届く。そそくさと寝る。通信、ネモト社長及び洪水企画へ礼状、それにメアリー・コリンに義父の歌集。

▲2017.12.12 未明。詩集『ロボット』（仮題）の編集。一応、ただ並べてみた。約百行、三九篇の長詩となる。これをLPマット紙にこつこつと印刷しようかと思う。綴じ方は、ダブルブルーリングで。妄想が膨らむ。外は、雪。

▲2017.12.16 帰宅後、ラジオを聴いている。詩集『ロボット』のした原稿の作成、それを息子と妻に見せる。反応は、なんとなく通じたかなと言うもの。二カ所ほど言葉遣いの間違いを教えてもらう。

▲2017.12.17 妻を送り届け、終日家に籠もる。最初に adana 1931 baby の胸張りを調整。印字してみたら圧は四隅で均等なので問題ない。次に、詩集『ロボット』の編集。それから中表紙をエンボスで印刷する。紙を断裁し、版組を作って、レイアウトを実際に調整し、印刷。LP M A T はエンボスは楽に出る。裏にも出てしまうが、まあまあよしよしうね。昼にナポリタンを作る。

▲2017.12.19 寝床でミハエル・エンディ『はてしない物語』。翻訳者の死を知る。どうも詩集『ロボット』を推敲して読んでいると、この物語と重なる。早朝に、年始用林檎注文。

▲2017.12.23 寝床で、郭南燕『キリシタンが拓いた日本語文学―多言語多文化交流の淵源』（明石書店、二〇一七年九月七日刊）とミハエル・エンディ『はてしない物語』。併読。

▲2017.12.25 未明の朝。日記の製造を一日分。ミハエル・エンディ『はてしない物語』読了。

▲2017.12.26 寝床でミハエル・エンディ『鏡のなかの鏡』、どうも自分が漠然と考えている、そんなような世界を見つけてしまいそう。そういう妙な感覚がある。

▲2017.12.29 仮眠（一時間）状態で、小滝そばと狸森焙煎所へ。小滝そばでもりとげそ上げ。狸森焙煎所でシティとガトーショコラ、やはり爽や

したところは断念。ホテルに入る。夜、息子と焼き肉。断酒を切断。

▲2017.12.03 町田に向かう。前に来た時は、車だったので初めて街にきた感覚。急な下り坂を降りると国際版画美術館があった。大学版画作品展についていか、即売会なのです。武蔵美の方のものを一つ購入。前に来た時よりも三倍の値段になっていた。驚き。その後、横浜に行き、娘夫婦と昼食。それ終わり、今度は恵比寿へ。東京都写真美術館、ユージン・スミス展。改めて、モノクロ写真の強さを感じる。光のとらえ方が上手。というか、光を狙っている。『疾駆』第六号があったので買う。簡易な装幀に驚くとともに、これは使えると思

▲2017.12.05 迷った末に、臘八摂心に行く。座ス、一年ぶり。鼻水が垂れ落ちる、そのことを意識しない。無意識を意識する無意識。



▲2017.12.01 無理のない起床。じいさんの妻がお亡くなりになったことを知る。寂しい朝、終日、なにか厳かな気持ちでいなければならない。胸の痛みが出る。時に、蹲るほどの激痛となる。どうしたものか分からず。寝床でミハエル・エンディ『はてしない話』、日中は鳥尾敏雄『死の棘日記』、併読続く。



▲2017.12.09 未明。クラブワールドカップの浦和初戦の後半を見る。真野氏から久しぶりに連絡あり、次号の詩誌のことでやりとりあり。休日は少し余裕がある。外が明るくなったので、マルと散歩。久しぶりか、河原を一周。朝食後、和紙の裁断。それ終わり、手紙を三通出すために郵便局へ。帰宅後、原稿用紙の印刷。依頼主の名前と右上に（ ）を入れ、組版を行い、見当

かな珈琲だ。それなのに確かな濃がある。それが確かめられただけで来て良かった。詩集『ロボット』の推敲。佐々木洋一氏の『サヤンカの村第二八号』良かった。気持ちが明るくなる。家に帰り、出し忘れたゴミをクリーンセンターに届け（黄色い袋に入る物は無料）。それから年賀状の組版開始。ここぞ今日の疲れ、かなり強くなる。頭痛あり。

▲2017.12.31 夜のテレビで『ザ・ビートルズ EIGHT DAYS A WEEK』（二〇一六年／英）に遭遇、見とれる。彼らは、やはり破壊屋だ。ずっと見ようとしたが、年越し蕎麦を無理に食べたので、腹がキツくなり、気持ち悪い状態で、根気が続かず。即寝。

▲2018.01.03 正木香子『文字と楽園―精興社書体であじわう現代文学』を読む。どうも書体で本の内容の感じ方が変わるということが理解できな

▲2018.01.04 帰宅して、伯父の死を知る。伯母から何度も電話あり。

▲2018.01.15 未明。程なく、山際が明るくなる。先日、長岡に同行をさせていただいた方が小値賀島の活版印刷所の方に連絡をしてくれたとのこと。嬉し。賀状、幾つか届く。活版印刷所関係から二通、嬉し。憂鬱な日だったが、少し明るくなる。しかし、不安が残る。何の不安か、漠然としている。気が晴れない。仕方なし。

▲2018.01.16 この頃、郭南燕『キリシタンが拓いた日本語文学―多言語多文化交流の淵源』を読んでいるが、やっと面白くなる。

▲2018.01.20 朝食後、正統糊づくり。小麦粉一キロ×二袋に手掴みで一

つと気持ち少々塩を混ぜ、ステンレスの盥で捏ねる。約十五分ほど固まりとなり、餅に近くなる。それ（盥）にラップを掛け、息子の運転で外出。県立図書館。帰宅して、かなり沈正統が沈殿している。昼食後、上水を捨て、それを一つの容器に集める。しばらく、沈殿させる。今日の作業はこま



で。

▼20180121 昨日の続きの正麴糊の仕込み、約二時間で完成。

▼20180127 午後、ワークショップに出発。会場準備は、十五分前に終了。参加者三名。進行表を作り、余計な情報を入れずに行う。予定時間内で解版まで行える。成功と思う。

▼20180203 未明。必要な漢字の一覧づくり、部首二角まで作る。マルが泣くので、まだ夜明け前だが散歩する。家について、やっと空が明るくなる。午前、届いた活字の整理、一八ボも八ボもひらがなを整理。気の遠くなるような作業だが、楽し。午後、時間が無くなり、急いで昼食、小さなクロワッサンとバゲット少々、それに今日届いた ITTA COFFEE のコスタリカ・ブラックハニー・ガンボア農園という珈琲豆を飲む。浅煎りなので、とても酸味が強い。それに、淹れ方が粗雑、お湯をあまり大量に注ぎすぎたのだと思う。滴を垂らすようにすれば良い感じになるかな。次回はそうしよう。ホームセンターへ行き、活字のすだれの収納ケースを作るための資材を買う。途中でお腹が痛くなる。どうやら昼に食べた菓子里に牛乳が入っていたらしい。かなり体力が奪われる。生協に寄って、クリーニングと夕食の食材を買う。夜、疲労感があり、ケースの設計は諦める。赤ワインを飲んで、気分を減茶苦茶にして寝る。

▼20180210 朝食後、屋根裏の倉庫の整理開始。結局、お昼過ぎまでかかる。午後、郵便局から受け取り、竹林嘉子さんから和牛のイラスト。友人から怪獣のイラスト届く。adams five eight 届く。チェイスが付いていて良かった。ever note を再度有料化する。

▼20180212 未明。工房で、詩集の棚組みを行う。横浜で和綴じ本のワークショップに参加、作り方が以前教わった方法とかなり違う、道具も違う。それが面白い。午後二時半には終了、それから珈琲をいただき雑話となる。自分は、何が起るのか分からないので、しばらく居る。

▼20180218 朝食後、県立図書館へ、文学館、塩竈エスプ、菅野美術館、杉村美術館（コーヒーを飲む、あつまりして、均質な濃くがあり美味しい（ペーパードリッパ）、最後に図書館。次、仙台に戻り、火星の庭、マゼラン、ホルン、美術館。午後二時には帰り、寝る。一時間して起きて、ずっと心の中に詩の言葉が入ってきます。その瞬間に、私の中で浮遊している感覚が生じます。一瞬のことですが、その瞬間を作者と共有できるということが、私の勝手な思い込みによっても嬉しくなりました。それが、前述の「救い」という言葉に繋がります。

詩誌『ササヤンカの村』では、必ず最初に短い詞書きが付きます。今回は「身の回りの生き物たちへ（人類であることのはずかしさ）」という表題を持つ、全部で二百字程度の文章です。のっけから強烈な言葉で始まります。

「自然保護などというのは、人類のための自然保護であって、自然にとってはありがた迷惑な事かも知れない。人類がいなくなれば、自然は自然の姿を取り戻していく。ただそれだけだ。」

（詞書きの前段）

この詞書きそのままに、六篇の詩が綴られています。そこに書かれてある言葉は自己完結しています。他人を寄せ付けない強さを持っています。故に、他人を惹きつけます。詞書きは、頭で、「思考」を書いているのですが、詩は頭では書いていない印象を持ちます。簡単に言うと、歴史の中で書かれています。ここで言う「歴史」とは、人間が紙に綴って造ったきた「歴史」ではなく、人の頭を飛び越えた出来事であり、否応なしに体に刻まれた物語です。

詩「内輪なくらし」の全文を掲載します。

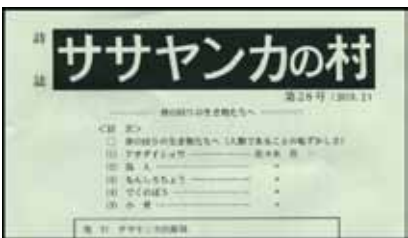
眠りかけた草を起こし
わたしを触れる
みみずを起こし
湿り気を触れる
沈みかけた石を起こし
割れ目を触れる

た大出張のすだれを並べる。結局午後七時までかかる、それで九割程度の完成。

▼20180213 数日前から読み始めていた樋口桂子『日本人とリズム感―「拍」をめぐる日本文化論―』（青土社）が面白くなる。フロイトの不気味、それから（忘れた）。

▼20180224 朝食後、畑に堆肥を入れ、耕す、石灰も入れた。隣家の方が来て、ジャガイモには石灰は入れないとの忠告を受ける。八ボの活字の整理。根気の要る作業、ちよっと嫌気が差す。午後妻と仙台へ、いつもの店で五千円のクーポン券を使って、ロングのTシャツを買う。店長が、もつと買物に来てねという顔をしている。その後、喫茶店でくつろぐ（まったくくつろげなかったが、ちよっと都会の気分を味わう）。佐々木洋一氏の詩詩「ササヤンカの村」第二十八号のことを書き始める。

▼佐々木洋一氏が発行するB四判二枚を二つ折りにして中にB五判の紙一枚挟み、二段で詩を載せている全部で六ページの詩誌です。今号は、発行年月日が二〇一八年二月と印刷されているのに、何故か、かなりのフライングで二〇一七年の年末に届きました（私が書いている時点ではちよっと二〇一八年二月です）。私にとっては、前号でちよっと力を入れたすぎたで読んでも、後味が悪かったのでしたが、今回の詩誌は楽しく読めました。同じ年の内に、窮屈になった心を解き放つ爽やかな風が高地から届き、救いのような期待感を持つことができて嬉しくなりました。



ここに収められている六つの詩編は、どれも力みが感じられません。それは、読んでいる私の中で起こっているのか、それとも作者である佐々木洋一氏の中で起こっているのか、定かではありません。しかし、

そんな内輪なくらしが続いている

詩「内輪なくらし」全文

この詞書きの一部として余白のように綴られた詩の中では、「わたし」は、草やみみずや石と並列に語られます。「わたし」はただ単なる対象ではありません。通常、「わたし」という言葉は、対象とはならない自分を表現するための特別な言葉です。逆に言うと、草や石やみみずが自分となって、「わたし」と語っているような不思議な言葉となっています。つまり、「わたし」と言ったときに、「あなた」との違いが普通は生じるのですが、その違いの境界線がないのです。さらに「わたし」と書いたときに、そこには特別な「わたし」が存在するのが普通なのですが、ここには特別な「わたし」はいません。

佐々木洋一が描き続けているササヤンカ村とは、そういう境界のない世界ではないかと考えます。

スッチョン鳥 トントン鳥 ソシラヌ鳥
オドケ鳥 ツンツン鳥 ノホホン鳥 シノビ鳥

人のことが厭きるようになってから
鳥のことが気になりだした
鳥のことが気になりだしたと言っても
図鑑をたどりながら鳥の名前をあれこれ詮索する興味とは違う

（中略）

僕は鳥のことが気になって
人と鳥の狭間で口笛を鳴らす
時々応えてくれる鳥がいて
僕はそれを鳥人と呼んでいる

鳥人属のホットケ鳥は
ホットケホットケと応えてくれ
なぜか一番ホットケなくて
僕はしつこくこの現世の口笛を鳴らし続けている

詩「鳥人」最初の二連と終わりの二連

人間が鳥になっています。いや、鳥が人間になっているのです。人間の言葉で鳥のことを語り、鳥の言葉で人間のことを語っています。そこに理屈はありません。また、説明も必要ないのです。修辭でもありません。読むと、何故か気持ちやすつきりとするのです。それはどうしてでしょうか。多分、言葉が理屈を超えているからではないでしょうか。あれこれと物事を考え、理屈を捏ねて、自分や物事を書き表すことに「厭きた」自分がいるからではないでしょうか。そういう理屈を、きれいさっぱりとこの詩は「ただの屁理屈だ」と言って否定しています。それは、詞書きに書かれていることそのままなのではないでしょうか。

▼20180315 阪田寛夫は面白い。夜、読書会のために朴氏の俳句を整理。

▼20180316 未明。読書会に向け、資料の作成。外が明るくなつたのでマルの散歩。ちよつと、気持ちの整理が付かないためか、心拍数が高い。梅の蕾、ほんのりと色を帯びる。午前、息子の退院。

▼20180322 夜、十八活字の整理、なんとか先が見えてきた。『リー・ロニッツジャズ・インプロヴァイザーの軌跡』(DU BOOKS)面白い。

▼20180401 朝食後、詩集の印刷に取りかかる。まずは中表紙。次に本文、それぞれ一枚ずつ見当を間違ふ。本文の印刷は午後まで。

▼20180403 娘が出産。娘が、娘の顔ではなくなる。母の顔になっている。

▼20180407 午睡前及び就寝前に読む『リー・ロニッツジャズ・インプロヴァイザーの軌跡』は面白い、ロニッツが如何に即興演奏にこだわって

いたか、その基礎がトリストアーノの指導により形作られたいたのか、凄く分かる。

▼20180408 午前十時過ぎ出立。読書会のチラシ配り、美術館、骨プロ、メアリーコリン、火星の庭、マゼラン、ホルン。ホルンで試作品のマレイドをいただく。三越でバゲットとクロワッサン三個。近くのコーヒースタンドで珈琲をテイクアウト(飲みやすい、味によそ行き、あれの特徴あり) 味かな。

▼20180412 未明。家人の急変で目を覚ます。急遽、赤いランプの車で病院に行く。一瞬、死が訪れることの現実を見る。果ては、なにになにちゃん、なににさんを呼びなさいと救急隊の方に言われる。臨終の覚悟を決める、いや決められない。妻と、娘の夫で四時間待つ。理屈では言えない。

▼20180421 村上かつみ氏から切り絵の作品『夜の向ふに広い海のある夢を見た』(尾形亀之助の詩への作品)が届く、活版印刷のための小さな工房に飾る。



とても質素ですが、芸術の香りの溢れる素敵な空間です。定禅寺通りに面するビルの奥にひっそりとお店はありますので、静かな時間を過ごすのに最適な喫茶店です。

喫茶ホルン

仙台市青葉区立町の喫茶ホルンです。フレンチプレスで抽出するスペシャルティ珈琲や南インドカレーなどをお出ししています。

営業時間 火曜～日曜11:00～19:00
(月曜定休)

所在地 〒980-0822
宮城県仙台市青葉区立町26-17-202
(定禅寺通り・せんたいメディアテーク向かいの甘栗屋さんの2Fです)

電話 022-711-5520
Twitter: @kissahorn
URL: <http://kissahorn.blogspot.com/>

!!! ランチプレートを始めました!!!
お昼の午後12時～午後2時は南インドカレーのランチプレートもあります。ドリンクも150～200円プラスでオーダーできるお得なサービスです。

●寄稿者住所

金子忠政	宮城県白石市福岡長袋字永坂15の1
前沢ひとみ	宮城県富谷市(在住)
秋網まさお	宮城県仙台市青葉区葉山町3-5-201
真野絵里加	

ふくらみが 絶えてしまったようだ

手に負えない

等距離の時間が満ちてくる

「ダルマさんがころんだ」

なんて、みんなうそぶいて

引き裂かれた馴染みを探している

一筋のためらいが漂う潮の目に、同意を委ね
軋る回転扉の裏側に

感覚が振り切れまるまった恐怖がしがみつく

3Dのプリンターに、約束された柵が搔かる

パントマイムな「届け物」

平面図が押し広げる空間の

他人事という悲しさ

忘れ物もないのに、戸口を

押し戻してのぞく

ないこと

なくなること

が

正面を

忌避する

視力合わせをもてあそぶように

二つの目玉がピントをたぶらかす

小石を投ずるわたしの仕業が

角に触れて、揺らぎが剥落する

ふくらむ一方的な立体図

もはやリアル

了

海岸を梳って

真野絵里加

ちいさな手が
さりさりと海岸を梳ってゆく

海岸に埋もれるのは
貝殻、陶片、そして半ば朽ちたわたしの骨

長く石の夢を辿り
波の思念にこころを寄せた

けれど
いつかある日

ちいさな手が
わたしの頤であつた骨を拾い上げるだろう

そして

あなたの指先であつた骨も一緒に

わたしたちの骨は

透明な袋に入れられて、時折触れあう

ほんのかすかに

朽ち果ててなお

あなたはわたしに触れる
からんと音を立てて

わたしは
幸福な貝がうっとり

吐き出した息を
自分のもののように眺めるだろう

森の中

小熊昭広

粗野な

あの空に罌を仕掛けました
飛ぶ鳥を捕まえようとしたのです
誰にも見つからないようにと朝、静かに
狙っているのです

空の穴の

盲点に向かつて

なにかが吐き出されてゆきます

あなたの悲しい記憶や

辛い思いが

ただ、ただ

楽しかった思い出も

それぞれが天上を通り抜け

この世界から消えてしまいます
それでもいいですか

通気口は

濡れていました

したり落ちる滴しずくは人の声を

拾ってくれるのです

濁りととも

地上に降りる前に

鳥たちが

小さな欠片かけらとなった

粗目ざらめのような汚点を啄つばむのです

あら、綺麗です

軒先に

吊した洗濯物を折りたたみ

空はふんわりした布の

感触だったりします

これ、自分だったらどうしよう

網は

どんなものでも掬います

小さな口に付いてしまったヨーグルトも

あつという間に取り出して

食べてしまいます

うつすらと

外が明るくなる頃

一羽の鳥が

罨にかかってしまいました

彼は、鳴くのです

空は

それに見向きもせずに

黒い翼を広げ、一羽の鳥を呑み込みます

彼は

いったい何処にいるのでしょうか

空気の

おならが声を出して

語っています

「わたしはただ匂いを嗅いだだけなのです」

それはそうです

知らないものに

曲がり道で突然に出くわしたとき

驚かないでくださいね

それは、あなたの顔がそのままに

一羽の鳥になっているのです、からね

マルの朝

小熊昭広

遠くを見ている
近くは見ない
マルが鼻を地面に擦りつけて
匂いを嗅いでいる

その向こう側で
太陽が昇り
太陽が沈む
彼は、それを見てはいない

わたしはノンビリとして
朝のヒンヤリとした空気の中を
ポケットに手を入れて
ポーッととして、それを見ていたのだが

マルはあちこち動き回り
手に持つリードが離せない
他の犬の匂いをかぎつけたらしい
どんどんと進む

臭覚が
あまりない人間には
お日様の光の移ろいを見ているだけで
意識は安らぐのだが

そんなことお構いなしに
近くにあるものに
手当たり次第に鼻を寄せてゆく
時には口の中に入れてお腹を満たす
干からびた
ミミズが道に転がっている
誰かが棄てたコンビニのおにぎりが
ビニールの包装紙と一緒に落ちている

そいつらを
お構いなしに胃袋に
入れようとする
その旺盛な好奇心だろうか、食欲だろうか

私は、その都度リードを引っ張り
変なものを食べないように
注意深く見ている
太陽は、気がついたら頭上に移動している
気の遠くなる距離が
あるときは実感し、あるときは実感できない
もう帰ろうかと、聞いてみると
まだ帰らないと、彼は言う

ランダム・メモリー

■一応、この小さな雑誌は、詩誌というところで嗜好を表しています。「一応」と書いたのは、詩とはいったいどんなものなのか、さっぱり分からないからなのです。そうは言っても、自称するからには、私なりにその時々で説明を試みるのですが、毎回違う結論になってしまいます。結論というほど、明確な定義を考えるわけではありませんが、その中で変わらない考えがあります。漠然とですが、詩とは文字で書かれたものではなく、作品を読まれた人の中で生じるもの、ということです。だから、私が、このように詩のようなものを書いていて、大上段に振りかざすのでは全くもってないらしいのです。このようなことをしなくてもそれなりに生活をしてゆければ、それに越したことはないと思います。

■他人行儀なことを書いていますが、いつも自分に満足できない自分があります。毎日のように彷徨っているのですが、積み重なっているはずの時間が、私にとっては、ただ漠然としたその時々のもろろしいものになっているようです。良い暮らしをしよふと思うのですが、そのため日々の営みを諦めないようにと思うのです。しかし、つい投げやりになってしまふ自分があります。世間ではそんな態度を示してしまうと、怒られてしまうのです。私にとって詩誌『回生』は、それでも許してくれそうなのです。そんなちいさな安心があると思っています。

■今号も、金子忠政さん、前沢ひとみさん、秋網まさおさん、真野絵里加さんから寄稿いただきました。感謝申し上げます。金子さんには、詩人郡山弘史のことを書いた文章を掲載していただきました。連載となる序章ということと理解しております。今後の展開を切に希望しております。

■その時々のもろろしい中で求められる表現があると思います。文章を書く方も、文章を求める方も、なにかしらその時代において存在価値のあるものを探し求めている構図を結果的に浮きだたせようとしています。ある出来事が起きると、その自分のことのように社会のことと結び付けようとしています。そういうことに嫌悪を覚えることもあるのですが、それはそのまま自分を否定するようになるので、あまりやらないようにと慎みを持とうとしています。

■何を書いているのか分からなくなってきましたが、今回の詩誌『回生』の原稿の締め切りは九月末だと思います。ごなかでも作品を送っていたければ、掲載を検討致します。お待ちしております。

■最後に、今号も表紙画は明才さんをお願い致しました。めろろしい作品でとても気に入っています。(熊)

詩誌「回生」第め号（通巻第四一号）

発行 二〇一八年五月一五日

編集 小熊昭広

表紙画 明才

発行者

中村正秋（なかむら・まさあき）

〒371-0103 群馬県前橋市富士見町小暮

2225-15 tel 0272-88-9073

gcom@garagecom.jp

小熊昭広（くぐま・あきひろ）

〒989-1201 宮城県柴田郡大河原町大

谷字原前 50-5 tel 090-5230

-2349

URL www.poetic.jp/kaisei/

Mail kaisei@poetic.jp

Twitter @shishikaisei

発行所 快晴出版

定価 フリー（時価）